



JSPS LONDON



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター
2010年4~6月 ニュースレター（活動報告）

目次

●Recent Dialogues & Engagements—今四半期に JSPS London が接触した主な人物—	3
●業務報告	5
I. Headlines	5
1. センター長交代	5
就任にあたって—平松新センター長の挨拶	5
活気あふれる JSPS ロンドン—古川前センター長の挨拶	6
JSPS ロンドンネットワーク・イベント	10
2. UK-JSPS Alumni Association Goes from Strength to Strength	11
3. 在英日本人研究者会／英国 JSPS 同窓会へのサポートスキーム立ち上げ	11
II. 事業報告	12
1. JSPS 事業説明	12
在英日本大使館主催「Information Day at the Embassy of Japan in London」	12
JETRO ロンドン・エディンバラ総領事館・グラスゴー大学共催 Japan Day	13
マンチェスター大学事業説明会	13
2. 同窓会	13
BRIDGE Fellowship、FURUSATO Award 審査会の開催	13
Pre-Departure Seminar and Alumni Evening	15
3. 外国人特別研究員(欧米短期)	16
2010年度外国人特別研究員(欧米短期)第2回申請受付状況	16
4. 在英日本人研究者関係	18
在英日本人研究者との打合せ	18
III. トピックス	19

1. 会議・講演会等出席.....	19
ドイツ・Merkel 首相 The Royal Society King Charles II Medal 受賞式.....	19
The Royal Academy of Engineering 主催 PolicyNet General Election Sessions – Adam Afriyie 国会議員.....	19
「グリーンマニュファクチャリングとエコイノベーション」シンポジウムの開催.....	20
The Royal Asiatic Society 年次総会.....	20
グレートブリテン・ササカワ財団設立 25 周年記念レセプション.....	20
小野理事長 UCL 訪問.....	21
Royal Society 350 周年記念式典.....	21
Parliamentary Links Day 「Science and the New Parliament」.....	23
2. 関係者との会談.....	23
Royal Society of Edinburgh 会長との会談.....	23
Information Exchange Meeting at the British Academy.....	23
Meeting at the British Library.....	24
IV. 在英政府関連団体連絡協議会.....	24
ロンドン政府系法人勉強会.....	24
広報連絡会議.....	24
V. アドバイザー・国際協力員の着任.....	24
●英国学術調査報告.....	25
I. 政府の学術関連政策の動向.....	25
1. ビジネス・イノベーション・技能省 (BIS).....	25
新政権発足.....	25
デイビッド・ウィレットツ大学・科学担当大臣の初めての基調講演.....	25
大学・カレッジへの予算削減に関する協力要請.....	25
ウィレットツ大臣が、「宇宙リーダーシップ委員会 (Space Leadership Council)」を立ち上げ.....	25
ケーブル大臣の初めての講演.....	26
ウィレットツ大臣の基調講演.....	26
経営者や学習者の意向を反映した新しいスキルを獲得するための戦略.....	26
社会人教育を行うカレッジが £ 50 百万規模のプロジェクトに参加.....	27
2. 財務省.....	27
政府は 2010-11 年予算の一部凍結を発表.....	27
II. 学術振興機関の研究施策の動向.....	27
1. 英国研究会議 (RCUK).....	27
産学連携会議 (Council for Industry and Higher Education(CIHE)) が公表した産学連携の効果に関する報告書.....	27
2010・2011 年の奨学金の限度額公表.....	27
英国研究会議 (RCUK) と英国大学協会 (UUK) は、英国高等教育機関において研究費にかかる経済的な費用に関する評価について所見を発表.....	28
2. 英国バイオテクノロジー・生物科学研究会議 (BBSRC).....	28

生物科学分野における英国-欧州の共同研究の実施について	28
3. 医学研究会議 (MRC)	29
医学研究会議 (MRC) が、カナダとドイツと神経変性研究分野において国際協力を開始	29
III. 高等教育助成機関及び関連機関・団体の動向.....	29
1. 英国高等教育財政会議 (HEFCE)	29
高等教育機関の産学連携に関する調査.....	29
多くの生徒への財政的支援	29
2010-11 年の定員及び財政的支援	29
2. ウェールズ高等教育財政会議 (HEFCW)	30
大学が地方のニーズに対して果たす責任	30
高等教育に関する新戦略について	30
3. スコットランド財政会議 (SFC)	30
2010・11 年度の高等教育機関の支援.....	30
カレッジを活用したスコットランドの経済対策	31
スコットランド財政会議がビジネス・イノベーション・スキームを促進.....	31
4. 高等教育統計局 (HESA)	31
高等教育機関の資産に関する報告書について.....	31
5. ラッセルグループ	31
英国の大学が国際的に優位に立つことの重要性.....	31
英国高等教育機関の将来のために、卒業生が行う貢献	32
IV. 大学等研究機関の紹介	32
●業務日程.....	34

Recent Dialogues & Engagements—今四半期に JSPS London が接触した主な人物—

在英英国人等

- ◆ Her Majesty The Queen Elizabeth II (Royal Society 350 周年記念式典にて)
- ◆ Angela Merkel, Chancellor of the Federal Republic of Germany
- ◆ Rt Hon David Willetts MP, Minister of State for Universities and Science
- ◆ Rt Hon Ed Miliband MP, Shadow Secretary of State for Energy and Climate Change
- ◆ Prof David Cope, Director of the Parliamentary Office of Science and Technology
- ◆ Prof Sir John Beddington CMG FRS, Chief Scientific Adviser HM Government
- ◆ Adam Afriyie MP, Shadow Minister for Innovation, Universities and Skills (当時)
- ◆ His Excellency, Sir Michael Arthur, British Ambassador to Germany
- ◆ His Excellency, Mr Georg Boomgaarden, German Ambassador to the UK
- ◆ Lord Martin Rees of Ludlow PRS, President, The Royal Society

- ◆ Prof Lorna Casselton FRS, Foreign Secretary and Vice President, The Royal Society
- ◆ Dr William Duncan, Chief Executive, The Royal Society of Edinburgh
- ◆ Mr Philip Greenish CBE, Chief Executive, The Royal Academy of Engineering
- ◆ Sir Geoffrey Allen FRS
- ◆ Sir Brian Heap FRS, Chair-elect, EASAC
- ◆ Prof David Delpy, Chief Executive, EPSRC
- ◆ The Earl of Selborne KBE FRS, Chairman, The Foundation for Science and Technology
- ◆ Stephen McEnally, Chief Executive, London Head Office, The Great Britain Sasakawa Foundation
- ◆ Prof Brian Greenwood CBE FRCP FRS, Manson Professor of Clinical Tropical Medicine, London School of Hygiene & Tropical Medicine (第1回野口英世アフリカ賞受賞者)
- ◆ CNR Rao FRS, CSIR Centre of Excellence in Chemistry
- ◆ Mike Winter OBE, Director, International Affairs, Institute of Education
- ◆ Prof Semir Zeki FRS, Council of the Royal Society / Head, Laboratory of Neurobiology, UCL
- ◆ Prof Nick Tyler, Head of Department of Civil and Environmental Engineering, UCL
- ◆ Prof Clifford M Friend, Deputy Vice-Chancellor, Cranfield University
- ◆ Dr Lee-Ann Coleman, Head of Scientific, Technical and Medical Information, British Library
- ◆ Mr Hamish Todd, Head of Japanese Section, British Library
- ◆ Mr Richard Ranft, Head of the Sound Archive, British Library

在英邦人

- ◆ 海老原駐英国大使
- ◆ 岡在英国日本大使館公使
- ◆ 岡庭在英国日本大使館公使
- ◆ 花岡在英日本商工会議所(JCCI UK)事務総長
- ◆ 栗山日本貿易振興機構(JETRO)副所長
- ◆ 山本日本クラブ事務局長
- ◆ アスロン日本航空(JAL)ロンドン支店営業所長
- ◆ 石田国際交流基金(Japan Foundation)所長
- ◆ 藤島自治体国際化協会(CLAIR)所長
- ◆ 吉田国際観光振興機構(JNTO)所長
- ◆ 高橋日本スポーツ振興センター(NAASH)所長

日本等からの出張者

- ◆ 笹川日本財団会長
- ◆ 尾身 STS フォーラム理事長
- ◆ 金澤日本学術会議会長

● 業務報告

I. Headlines

1. センター長交代

就任にあたって—平松新センター長の挨拶



平松 幸三
 (独) 日本学術振興会
 ロンドン研究連絡センター長

2010年5月11日、ロンドン研究連絡センターに着任しました。任期は2年間の予定です。どうかよろしくお願ひします。5月1日のはずだった着任が遅れたのは、事務引き継ぎを受けるため、4月中旬に3泊5日の予定で来たところ、例の火山噴火で2週間足止めを食らった後遺症でした。ロンドンセンターは、これまでに駐在された先輩たちが基盤を固めて来られた上に、古川前センター長が敏腕を揮ってしっかりとしたルールを敷かれたので、大学教員を定年退職して、新しい仕事を始める身としては、この時期の就任は幸運でした。

出国前、小野理事長から「海外研究連絡センターは学術の大使館」との激励(?)を受けてきてみると、なるほどこちらの学術団体や大学と交流するにつれ、理事長の言葉に納得。6月23日に招かれたロイヤル・ソサエティの350周年記念式典は、世界各国から学術団体関係者が集い、感慨深いものでした。この国の学術の歴史のなんと長くて厚いこと!

イギリスで暮らすのは2度目です。前はブリテッシュ・カウンシルのフェロウとして1981年から1年間サウサンプトン大学で客員研究員をさせていただきました。立場変わって、こんどはイギリスの研究者を日本に送る仕事をするのも何かの御縁か、個人的にはご恩返しのもつもりではありますが。

来し方を振り返ると、当たり前ですが、日本もイギリスもそれなりに変わりました。日本の大学が過去20年近く大きく変わりつつあるとき、中にいた者の実感としてはシャッフルされている気分。私立大学が若年層の減少に対応して企業(?)努力に余念ないとき、国立大学もあぐらをかいているわけにはいきません。大学が時代の変化に応じた改革をなすのは当然ですが、それは個人としては、大学に対していただく自分のイメージと実態とが部分的に乖離していく経験でした。歓迎することもあり、そうでないこともあり、何事に

もよし悪しはあります。新しい時代に大学も入って、老兵は消え去る秋がきたということでしょう。

イギリスの大学も日本に先行してずいぶん変わりました。さまざまな改革を余儀なくされたようで、15年前に国際学会で会ったとき、サウサンプトンのかつての同僚が言いました。「君がいたころがいちばんよかったよ」。「古きよき」イギリスの大学を愛していたのでしょ。イギリスの大学改革のうちでは、ポリテクニクの大学化が大きかったと思いますが、増やした大学を維持するのが難しくなったのか、最近には逆に規模を縮小したり、分野を特化したりする傾向が見られます。規模の縮小は教員にとって恐怖で、来年も大学にいられるかどうか。また最近では活動の「インパクト」が求められ、学術的、教育的、社会的な貢献がさまざまな形で評価されます。私の記憶が正しければ、「インパクト」の重要性を強調したのは、サッチャー元首相。30年前のことです。イギリスの学術レベルは高いにもかかわらず、企業の技術力が相対的に低い、と。そのとき逆の事例として日本が引き合いに出されて、あれには苦笑しました。

研究者は、ややすると自己満足に陥りがちで、これは否定できないとしても、ただだからこそとんでもない独創的な仕事もなされることもありましょ。その点「インパクト」を重視すると、多くは自らの仕事をより客観的に観て、有用性の高い(学術的にも)研究を心がけるようになるでしょう。それは平均的にはよい結果を生むのかもしれませんが、うらはらに現存する学術的、教育的、社会的環境にすり寄りおそ



(JSPS ロンドン職員と)

れも生まれます。ニュートンやソシュールは今の時代に学者として生き延びたかどうか。日本でも湯川秀樹先生、岡潔先生はどうでしょう。それに、少なからぬ研究者・学者は、自分の仕事の「インパクト」を意識していない、と言うより、分からないのではないのでしょうか。一方、それに劣らぬ数の研究者は、自らの研究が世界一だと、ひそかに、中にはおおっぴらに、自負なさいます。

産業革命を逸速く達成したイギリスは、1851年ロンドンで開催された第1回万国博覧会で出品物の質において他を圧倒し、結果、メダルの約半数を獲得して、それは技術水準の高さを反映したものでした。ところがその16年後に開かれたパリ万博、イギリスの出品物で入賞したのは僅かに1割強に減ってしまいます。この間にヨーロッパ大陸諸国の技術水準が上がった結果ですが、その背景には大陸における技術教育の充実があった、と指摘されています(三好信浩『明治のエンジニア教育』)。技術教育は「インパクト」が表面化しやすいものです。イギリスの技術教育は、当時もその後も、学理の教授を重視し、実務的訓練は卒業後の職場に委ねる傾向が強かったと言われます。おもしろいのは、19世紀後半に日本に技術教育を導入するべく雇われたイギリス人ダイアーが、実務教育の重要性を唱導していたことで、日本の技術教育には実習が取り入れられていたのですが、高度経済成長期に大学工学部が大きく拡充された頃から実務・実習より学理の教授に重点が移っていききました。設備の充実が追いつかなかったためでもありましょうし、新制大学になって専門課程の修業年限が短縮されたためでもあったでしょう。いずれにせよ、技術教育が学理重

視に移った頃から日本の科学技術は飛躍的に進歩し、技術大国となっていきました。大学が産業の発展に寄与したのか、それとも熱意あふれる優れた人材が技術系に集まっただけのことなのか、企業がしっかりと技術教育を社内で施す力をつけたためなのか。

大学のもつ知的資源を社会に反映させようとしている今、イギリスの大学はどのように変革を遂げていくのでしょうか。また、国家の干渉をきらい、セルフヘルプ、セルフサポートを重視する社会で国家がどのように大学の変革を支援するのか。学術の長い歴史をもち、いくたの困難を乗り越えてきたこの国がなそうとしている大学改革を身近に観察するのは、今私に与えられた任務のひとつで、それは歴史に立ち会う幸運とも言えるでしょう。



(Pre-departure セミナーにて)

活気あふれる JSPS ロンドン—古川前センター長の挨拶



古川 佑子
東京理科大学国際化推進センター長
(独) 大学評価・学位授与機構客員教授
東京農工大学客員教授

2007年4月から2009年5月まで3年間 JSPS ロンドン所長を務めさせていただいた。ロンドンのような世界の中核都市で、世界中から人が集まり、また、その影響力も世界中にひろまるインパクトある国際都市で貴重な経験をさせていただき感謝の意を表したい。日本の大学の方々、文部科学省、在英日本機関、英国の機関及び大学、在京英国大使館、在京 British Council、在ロンドン各国大使館科技ネット

ワークなど多くの方々に支えられ、有意義で実りある活気に満ちた3年間であった。また、日本学術振興会東京本部からは理事長、理事をはじめ、総務部長、研究事業部長、国



(JSPS本部から送られた花束と着任当時の JSPS ロンドン職員と)

際事業部長、直接の担当である海外研究連絡センター係、部を問わず多くの課からロンドンの活動に対し温かいご支援をいただき大変ありがたかった。また、英国、日本、そしてヨーロッパから、多くのかたに JSPS ロンドンを訪問いただき、示唆に富むご意見を頂戴できた。頭脳が活性化され、つぎつぎとアイデアの沸く源になったことはありがたいことであった。

1年目は JSPS 東京本部時代の人脈にくわえ、新たな人脈形成を展開し、JSPS ロンドン所長を覚えてもらうことから始まった。2年目は JSPS の事業活動及び日本の学术界での JSPS の位置づけ、事業概要、予算額を英国側にしっかり叩き込み、個人的にもかなり信用をいただいた。3年目はすっかり人脈が定着し、個人的な信頼も深まった。英国では個人対個人の信頼が築けないと仕事はできない。組織、ポストだけで、相手をみているわけではない。前所長がいかにきちんと構築された人脈でも、自分との人脈は新たに構築しなければ信用されない。



(新オフィスの内部改装工事)

海外センターの仕事はディプロマシーであり、学術ミッションと管理運営業務からなる。両輪のようにうまくみあわなければ優れた活動はできない。着任以来、ミッション業務は順調なすべりだしであったが、管理運営業務については、最高級地メイベアにあった事務所の移転が最初の仕事であった。おりしも英国は不動産バブル絶頂期であり、1ポンド250円という強気な経済状況にあった。引越しといえば事務機材を運び込むことのように日本では考えられるが、英国では、空間を購入して、内部を新規建設する作業であり、新築と同様な工事が必要になる。また、旧事務所についても現状回復し、ガス、水道、電気も公的機関の配線位置まで戻すことになる。大家の弁護士、当方の弁護士、などとの交渉も並大抵ではなかった。当時の外為レートで換

算された日本円ではかなりの予算オーバーとなるため、東京の了解もなかなか得られなかった。おそらく他の欧米 JSPS センターが比較的小規模な都市にあり、ロンドン、パリ、ニューヨークといった人口一千万人近い大都市にないため、東京にとっては想像を絶するようなロンドンの物価高を認識するのはむずかしかったのであろうと思う。前任の小山内所長のご苦勞のあとを引き継ぎ、前都外川副所長のお陰で、着任して6ヶ月を経て、蒸気機関車で有名な George Stephenson の名を冠した Stephenson Way に事務所の移転を果たした。その後旧事務所の現状回復にさらに6か月を要することになる。このような経験はなかなかできるものではなく、英国の舞台裏を最初に見せていただいた数少ない所長となった。

最初の1年はイギリス英語のむずかしさを実感し、自分がアメリカ英語しかしらなかったことを思い知らされた。イギリス英語のむずかしさは発音だけではない。話題や表現が違うのである。それも地域によって異なり、社会階層によって異なる。例えば、British Academy や Royal Society、Academic Society の会合や晩餐会では、労働者階級のスポーツであるサッカーの話題はさげなければならない。サッカー音痴の自分でもベッカム選手くらいは知っているが、上流階級での会話では、ベッカム選手の名をだそうものなら、「ベッカム選手のような人間にならないよう教育をどうするかが問題」などとやんわり論される。日本を代表するファンディングエージェンシー JSPS は上流階級とみなされている実感をもたねばならない。

3年をふりかえり、印象深い活動は、さまざまな学術分野のシンポジウムをはじめ、多岐にわたる活動など枚挙にいとまがないが、主なものをあげてみたい。最後の仕事になった英国同窓会と在英日本人研究者会議のシンポジウム公募については帰国ぎりぎりまでみなさまと検討させていただ



(Imperial College にてグロスター卿)

いたが、順調に軌道に乗ることを祈念している。

【2007年度】着任2日後に開催されたセミナーでグロスター卿(エリザベス女王のいとこ)及び野上駐英大使(当時)ご臨席のもとインペリアル大で開催された産学連携シンポジウム。日本から学長のご出席をいただいた東大カウンスルミーティング、UCL・慶応大学の医学セミナー、シェフィールド大・同志社大の社会学シンポジウム。事務所の引越しを祝う移転開所式が、新事務所にて行われ、University College London マルコム・グラント学長と木村猛大学評価・学位授与機構長が基調講演をしてくださり、セルボーン伯爵、クランフィールド大学長、キングスカレッジロンドン副学長、JSPS ロンドンにとって恵まれた大家となった Royal Asiatic Society 会長など賓客も多く大盛況であった。



(オフィス移転開所式 Malcolm Grant UCL 学長)

【2008年度】理研入来先生が編集委員である創刊から350年の権威ある学術雑誌 Royal Society Philosophical Transaction B (生物系)の日本特集号を共同で発行することができた。国別特集号は Royal Society 始まって以来であり、日本と中国だけである。出版記念シンポジウムは、在英日本大使館で行われ海老原大使にご挨拶いただいた。また、この年、大阪大学とラザフォードアップルトン研究所の共同研究に基づき、Science and Technology Facilities Council と JSPS の共同研究協定を締結できた。さらに、British Council との共催で第一回日英学長会議をロンドンで開催し、日本から16校、英国から20校の参加を得た。第二回は2010年11月九州大学で開催される予定である。【2009年度】バーミンガム大での化学シンポジウム。東北大学村理事のご配慮で開催された東北大—UCL 医学シンポジウム。また、4箇所で開催された東大フォーラムは圧巻であった。英国政府刊行 S&T 誌及び在英日本商工会議所発行誌に JSPS が寄稿したことなど。JSPS 説明会の

要望は年々増え、イングランドだけでなく、スコットランド、北アイルランド、アイルランドなどで開催し、日本 JSPS に対する関心の高さに圧倒された。

【英国 JSPS フェロー同窓会】日本への再訪問を可能にしたフェローシップ「FURUSATO Award」を JSPS ロンドンでたちあげ、それにより、同窓会活動が活発になり、会員数が130人から約2倍の260人になったことを誇りに思う。英国同窓会はインペリアルカレッジロンドンのマーチン・キングスベリー教授を会長とし、理事を含め多くのかたの前向きな活動のお陰で大変成功している。JSPS フェローが英国の主な大学で教授やレクチャーになり、Royal Society の CEO になり、彼らがいまでも JSPS のことを思ってくださいるのは大変ありがたいことである。このような人脈は大切にしていきたい。欧米短期事業の募集と選考、FURUSATO Award の選考などに知恵を絞ってください。また、同窓会会長や理事は、他の機関でのレクチャーのおりに、JSPS を盛大に宣伝してください。そのような活動をしていただいていることを、いろいろな機関に招待されるたびに聞かされた。



(在英日本人研究者会議)

【在英日本人研究者会議】この会議も JSPS の活動を暖かくご支援くださった。もともとは、文科省岡本アドバイザーが発掘された英国で活躍される日本人研究者を束ね、新たにコンタクトをとったかたも加え、100人を超える会議になっている。日本で教育を受け、その後欧米にポストを得て研究を継続された先生がたで、JSPS 特別研究員だったかた、JSPS 若手研究者賞受賞者など、JSPS に関係されたかたも多い。日本の大学に対する思いも一入で、日本の大学国際化にとって貴重な人材であり、日本にとって財産である。理系が中心であるが、この会議の先生方にとってはサイエンスができれば国はあまり関係ないのかもしれない。それが本当の国際化なのではないかと教えられた。

【JSPS 事業説明会】3年間にわたり、英国の各大学を訪問し、積極的に JSPS 事業説明会を開催した。各大学では学長、副学長が暖かく迎えてくださり、元 JSPS フェローが力になってくださった。また、JSPS ロンドン職員はそのたびにいろいろ工夫をこらしてくれた。イングランドだけでなく、英国各地にいる JSPS 元フェローで主たる大学の教授となっておられるかたがたのその後の日本との学術協力の姿勢に深い感銘を受け、JSPS の過去50年にわたるフェローシップ事業の大切さを実感することになった。余談であるが、最後のセンター長会議欠席の原因となった2010年4月のアイスランド火山による航空の混乱のおり、BBCで毎日解説をしていたのは JSPS フェロー同窓会元会長(UCL 教授)である。



(ケンブリッジ大学にて表彰者発表)

在任3年の間に下院5回、上院2回と英国国会議事堂に招かれた。朝食会、ランチ、アフタヌーンティー、夕食会などさまざまな形態を経験させていただいた。朝食会は朝7時に始まる。大臣や国会議員がそれぞれ担当する分野の指導層と意見交換の場を積極的に設ける姿勢に感銘を受けた。関係者とのダイアログ、ネットワーキングを大切にする姿勢は、英国人だけでなく、自分のような外国人も含めてである。また、Royal Society においては、David Miliband 外務大臣、Nick Clegg 自民党党首、Boris Johnson ロンドン市長、ドイツ、アンジェラ・メルケル首相、エディンバラ公にお目にかかる機会を得た。学術と政治の相互協力、意見交換の場は非常に多い。

関口副所長、文科省からのアドバイザー、日本の大学出身の国際協力員のかたがたは優秀で、大変楽しく仕事を一緒にさせていただいた。若い前向きなかたばかりに恵まれた3年間だった。また、現地職員のポリ・ワトソンプログラムコーディネーターは必要なことはしっかりしてくれ、残業もいとわず、また、不要なことは一切しない、という珍しくできるよい職員であった。現地採用職員のむずかしさを見聞きする機会が多かったのでラッキーというほかない。彼女はウェールズ出身で、イングランドではない。ロンドンの人の話し方は自分にとっても怖いといっていたのが印象的であった。日本では英国はひとつの国との認識であるが、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドは当地ではあきらかに大きく違う。

知っているようで、知らないことばかりだった英国を堪能させていただいた3年間であった。帰国前のフェアウェルパーティーのかずかずは心に残るものばかりで、みなさまのあたたかいお気持ちが大変うれしかった。帰国後も、Royal Society 会長 Lord Rees 氏、EPSRC 会長 David Delpy 氏、Lord Selborne 伯爵、Jenkins 上院議員、マルコム・グラント UCL 学長などから暖かいメールをいただき、英国の礼儀や奥深さをあらためて認識しているところである。

最後に、行政的に困難な時期にロンドン勤務の3年間多大なご支援をいただいた(独)大学評価・学位授与機構に心から感謝したい。後任の平松先生のご健闘をお祈りするとともに JSPS ロンドンのますますの活躍を期待している。



(JSPS ロンドンスタッフ、同窓会幹部と帰任直前に)

JSPS ロンドンネットワークング・イベント



2010年4月27日、JSPS ロンドンが連携している関係機関（英国政府系機関、英国対応機関、英国大学、英国 JSPS 同窓会、在英日本人研究者、日本政府系機関、日系企業研究所など）との交流をさらに深めるため日英学術研究交流をテーマに参加者約 90 名を集めてネットワークング・イベントを開催した。

古川センター長から JSPS 及び JSPS ロンドンが同交流に果たす役割を紹介するとともに、それを受けて参加者からもコメント発表があり、両国の学術研究交流推進において、JSPS ロンドンへの期待や様々な機関が協働する重要性などが述べられた。

なお、当日は5月10日をもって JSPS ロンドン研究連絡センター長職が任期満了となる古川教授の送別会もあわ

せて行われ、古川センター長から参加者へ、在任中の支援に対する感謝の意が述べられた。古川センター長は2007年4月に着任以来、関係機関とのネットワーク拡大、英国 JSPS 同窓会の拡充、新規ファンディング・スキームの立ち上げ等、積極的にセンター活動の充実に尽力された。（主なコメント発表者は以下のとおり）

- Professor Sir John O' Reilly (クランフィールド大学長)
- Prof. Brian Greenwood CBE, FRCP, FRS (第一回野口英世賞受賞者、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院教授)
- Dr. Hans Hagen (ロイヤル・ソサイエティ国際部長)
- Dr. Martyn Kingsbury (英国同窓会長)
- Prof. Anthony J Stockwell



Professor Sir John O' Reilly (クランフィールド大学長)



Prof. Brian Greenwood CBE, FRCP, FRS (第一回野口英世賞受賞者、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院教授)

2. UK-JSPS Alumni Association Goes from Strength to Strength

Since its inception in 2006 with 116 fellows, membership of the UK-JSPS Alumni Association currently stands at 256, increasing by 100 alone between 2008 and 2009. There are now great incentives for past fellows to join with the 2 re-visitation programmes the UK-JSPS Alumni Association offers exclusive to members. These are the FURUSATO award and BRIDGE fellowship. They allow members to make short or longer trips to Japan to cultivate and strengthen their links with the Japanese academic community. To date, there have been 5 calls for the FURUSATO award and 2 for the BRIDGE fellowship. During each of these calls there has been a good rate of applications with JSPS London easily able to fill its quota. A wide range of projects have been funded from East Asian warfare and security policy to plant microbial ecology and accelerator physics. Through these projects also we are proud to say that the different generations of scientists and a good balance of institutions both in the UK and Japan have been represented. There continues to be a clear interest among UK researchers to develop their collaborative

research work with universities and research institutes in Japan. Moreover, these funding schemes play a very important part in strengthening UK-Japan academic linkages. The UK-JSPS Alumni Association is now finalising a new symposium scheme. This will allow members at PI level or equivalent, to apply for support for a symposium they are organising at departmental or institutional level, to promote further collaborative work with a Japanese counterpart in Japan. The final details of the scheme are now being discussed with the UK-JSPS Alumni Executive Committee and Regional Managers. To heighten the impact of this scheme, a second scheme is also planned to be run in tandem for Japanese researchers based in the UK. Similarly, these Japanese researchers, at PI level or equivalent, will be encouraged to apply for support for conferences that will create high-level collaboration between research groups in the UK and Japan. It is hoped the first call for applications for both schemes will be announced later in May.

(Watson)

3. 在英日本人研究者会／英国 JSPS 同窓会へのサポートスキーム立ち上げ

JSPS ロンドン、在英日本人研究者会および英国 JSPS 同窓会用にサポートスキームを立ち上げた。JSPS ロンドンと密接に関係している両組織の研究者に対して、日英シンポジウム開催のためのサポートを行うものである。具体的には、日本の優秀な研究者、大学等と共同して英国で開催するシンポジウムに対して、渡航旅費、開催費用等をサポートする。これまでも JSPS ロンドンは、日英の共同シンポジウムを主催、共催してきたが、一事業として公募制にすることにより、日本の学術研究のプレゼンス向上、日英共同研究促進、日本の大学の国際化支援、在英日本人研究者会および英国 JSPS 同窓会支援をさらに強化することを目的としている。英国において、日本人研究者および英国研究者の双方の側から日英の研究協力を強化することにより、日本の学術研究の国際化への相乗効果を狙っている。また、申請者(在英日本人研究者および英国 JSPS 同窓会員)の所属大学等が組織的にシンポジウムに関与することを重要視しており、学長、副学長、学部長などが参加し、日本の大学

等との関係強化を点ではなく、面で推進していくことを期待している。

2010年6月11日に公募を開始し、8月13日に申請締切り、9月上～中旬に採用決定という予定で、2011年2月までにシンポジウムを開催することとなる。今年度は立ち上げ年度ということもあり募集期間が非常に短くなったが、次回以降は前年度に募集を開始することを予定している。

【詳細情報】

・在英日本人研究者用：“Symposium Scheme for Japanese Researchers Based in the UK”

http://www.jsps.org/institute/fr_symposium20100601.html

・英国 JSPS 同窓会用：“Symposium Scheme for the UK-JSPS Alumni Association”

http://www.jsps.org/alumni/fr_symposium_20100601.html

(関口)

平松センター長のコラムー音が変わったロンドン

Director's Column

「イギリスで暮らすにあたり、もっとも大切なことは何でしょうか?」「ユーモアのセンス」。これは、30年前、ブリティッシュ・カウンシル・フェロウとしてサウサンプトンで客員

研究員をしたときの私と教授秘書との問答です。ユーモアとは、笑わせることではありません。私は優しさ、思いやりが底に流れていると思います。たとえば、お茶をしているとき、だれかがティーカップを床に落としたとします。とたんにそこにいる残りの人たちが、落とした人の立場を救うジョークを考えるのです。起こった事態はともかくとして、少し心理的距離をおいてそれを見る。心の余裕がなければユーモアある言葉をだすことはできません。イギリス暮らしの心地よさのひとつです。

ユーモアのセンスを大切にしている心の余裕がイギリス人から失われたとは思われませんが、でも30年ぶりに住んでみて「おやっ」と思うことがありました。

事務所の職員が車を運転中、ラウンド・アバウト(ロータリー)にさしかかりました。一旦停止です。ラウンド・アバウトの

中の車が通り過ぎたとき、一瞬進入が遅れたところ、とたんに後ろからクラクション。前回渡航前にBCからいただいた資料に法政大学ロンドン事務所が作成した英国生活ガイドがあり、そこにこう書かれていました。「イギリスでは、ギブウェイ精神が行き届いているので、車の運転は楽。クラクションが鳴ることはめったにない」と。私はそのときの滞在中にこちらの運転免許を取得しましたので、教習所でギブウェイ精神を仕込まれましたし、また実際クラクションはめったに聞きませんでした。ところが、今のロンドンではかなり頻繁にクラクションを聞きます。

そのほかにパトロールカーや救急車の信号音、ビルのセキュリティの警報音などが、けっこう頻繁にけたたましく響き渡る町に30年を隔ててロンドンは変わっていました。もちろん音の変化は社会の変化を受けています。ロンドンという町が、たぶんイギリス社会が、過去30年で少し世知辛くなった結果の音の変化ではないか、と思うのです。イギリス人がユーモアのセンスと心の余裕を失っていないとしたら、この変化は国際都市化が著しく進行したロンドンのような大都会の特徴なのではないでしょうか。

II. 事業報告

1. JSPS 事業説明

在英日本大使館主催「Information Day at the Embassy of Japan in London」

2010年4月27日、標記イベントが在英日本大使館にて行われた。本イベントは、英国大使館広報文化班が、英国大学事務局(国際担当部門)を対象に、JETプログラムと文科省国費留学生プログラムを紹介するもので、両プログラムのプレゼンテーション、経験者による談話、関係機関とのネットワーキングが行われた。JSPS ロンドンからは関口副センター長、横山国際協力員が出席し、JST、JICA、国際交流基金と共にブースを出展し JSPS フェローシップの事業説明を行った。UCL など約 40 の大学の職員が参加し、活発に質問や交流が行われた。



説明をする関口副センター長

(横山)

JETRO ロンドン・エディンバラ総領事館・グラスゴー大学共催 Japan Day

2010年5月7日、JETRO ロンドン・エディンバラ総領事館・グラスゴー大学共催 Japan Day がスコットランドのグラスゴー大学で開催された。本イベントは、在英日系企業と英国の大学および研究機関の有益なコネクションの形成、優れた技術シーズの発掘および共同研究等のスタートを目的とし、今回、グラスゴー大学およびスコットランド地域の主要なベンチャー企業が参加した。午前及び午後のセミナーでは、各参加機関より、研究開発の取組や成果や産学連携の実績や可能性について紹介があり、グラスゴー大学の

ある研究者からは、JSPS フェローシップ事業で研究室の学生を日本へ送り出している実績の紹介もあった。また、セミナー終了後には大学等研究機関と企業の1対1のミーティングの場も設けられた。

JSPS ロンドンからは、関口副センター長および多田国際協力員が参加し、昼食時及びセミナー終了後には JETRO ロンドンとともにブースを出展し、イベント参加者やグラスゴー大学の研究者や学生に対し、フェローシップや共同研究等の事業説明を行った。



国際事業全般を説明する関口副センター長



フェローシップ事業を説明する多田国際協力員

(多田)

マンチェスター大学事業説明会

2010年6月3日、イングランド北部に位置するマンチェスター大学で平松センター長が JSPS 事業説明を行った。

今回、平松センター長の着任挨拶を兼ね、自身の研究活動で以前よりつながりのあるマンチェスター大学において、JSPS 国際事業全般および JSPS ロンドンの活動状況についてプレゼンテーションを行った。マンチェスター大学に

おける事業説明は 2004 年 6 月以来であり、参加者された研究者や学生には、改めて日本との共同研究や研究者交流に興味を持っていただけた。

*マンチェスター大学については「大学等研究機関の紹介」ページで紹介。

(平松・多田)

2. 同窓会

BRIDGE Fellowship、FURUSATO Award 審査会の開催

2010年4月16日、英国同窓会会員を対象としたプログラムである BRIDGE Fellowship と JSPS London FURUSATO Award の審査会が開催された。JSPS London FURUSATO Award は平成 20 年度に JSPS ロンドンが独自に開始し、BRIDGE Fellowship は平成 21 年度から JSPS 本部で開始された事業であるが、両プログラム共に同

窓会員に再渡日の機会を与え、日本人研究者との研究協力関係を形成・維持・強化することを目的としている。

審査の結果、JSPS London FURUSATO Award は 13 件の申請の中から 4 名と補欠の 2 名が選出された。また、BRIDGE Fellowship は 7 件の申請の中から 5 名が選出され本部へ推薦されることとなった。

●JSPS London FURUSATO Award 採用者

氏名	所属	研究分野	受入機関
Pavel Karataev	Royal Holloway, University of London	Electromagnetic Radiation and Accelerator Physics	高エネルギー加速器研究機構
Philip Newland	University of Southampton	Neuroscience	山形大学
Achim Treumann	North East Proteome Analysis Facility (NEPAF) (part of the Centre of Excellence for Life Sciences)	Analytical Biochemistry, Proteomics	産業技術総合研究所
Irek Ulidowski	University of Leicester	Computer Science: Concurrency and Semantics	名古屋大学

●BRIDGE Fellowship 候補者

氏名	所属	研究分野	受入機関
Chitta Choudhury	University of Bournemouth	Oral Cancer	奈良県立医科大学
Martin Cockett	University of York	Molecular Chemistry	東京工業大学
Steven Hayward	University of East Anglia	Computing and Biological Sciences	お茶の水女子大学
Christopher Pearson	Rutherford Appleton Laboratory	Astrophysics	宇宙科学研究所
Jonathan Tyler	University of Oxford	Isotope Geochemistry, Palaeoclimatology	東京大学

(吉川)

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening



2010年5月27日、JSPS ロンドンにおいて JSPS サマープログラム、外国人特別研究員、外国人特別研究員(欧米短期)参加者のための Pre-Departure Seminarを開催した。

当日は平松センター長によるオープニングリマークから始まった。続いて、関口副センター長が JSPS の概要説明および外国人特別研究員プログラム(一般、欧米短期)参加者向けのプレゼンテーションを行い、吉川国際協力員がサマー・プログラム参加者向けのプレゼンテーションを行った。その後、Mr. Antonio Caraballo Ortiz, Dr. Mark Tame がフェローシップの体験談を発表した。各発表には日本での

生活への不安が軽減されるよう、生活面からのアドバイスが多く盛り込まれ、参加者からも積極的に質問が寄せられた。また、The Royal Society、The Great Britain Sasakawa Foundation からそれぞれの事業説明が行われ、帰国後のキャリアに関連する情報も提供された。

セミナー終了後に開催された JSPS Alumni Evening では同窓会長である Dr. Martyn Kingsbury による同窓会の説明が行われ、同窓会メンバーも多数参加した。参加者は同窓会メンバーや他フェローシップの参加者との交流を活発に深めていた。



平松センター長のオープニングリマーク



説明に聞き入る参加者

(吉川)

3. 外国人特別研究員(欧米短期)

2010年度外国人特別研究員(欧米短期)第2回申請受付状況

JSPS ロンドンでは、外国人特別研究員(欧米短期)事業の募集を年2回行っている。3月に開始した2010年度第2回(2010年11月1日~2011年3月31日渡日分)の募集では、6月1日の締め切りまでに下表のとおり36名の申請を受け付けた。今後は、人文・社会系は The British

Academy に、また自然科学系は EPSRC 等の Research Councils から紹介を受けた審査員及び在英日本人研究者に、書面審査を依頼し、本センターにおける審査会を経た後 JSPS 本部への推薦者が決定される。

2010年度外国人特別研究員(欧米短期)第2回申請受付総数

国籍別		
Nationality	No	Percentage
British	23	64%
Greek	3	8%
American	2	5%
German	2	5%
Belgian	1	3%
Dutch	1	3%
Italian	1	3%
Polish	1	3%
Portuguese	1	3%
Romanian	1	3%
Total	36	100%

大学別		
Current Affiliation (Institution)	No	Percentage
University of Cambridge	6	18%
University of Bristol	3	8%
Imperial College London	3	8%
The University of Nottingham	3	8%
University College London	3	8%
University of Bath	2	5%
Newcastle University	2	5%
University of Oxford	2	5%
Queen Mary, University of London	2	5%
University of Birmingham	1	3%
Cranfield University	1	3%
University of Leicester	1	3%
The University of Manchester	1	3%
University of Plymouth	1	3%
University of Southampton	1	3%
University of Sussex	1	3%
University of Warwick	1	3%
University of York	1	3%
Others	1	3%
Total	36	100%

自然科学分野 (Natural Sciences)

国籍別		
Nationality	No	Percentage
British	21	67%
Greek	3	9%
German	2	6%
American	1	3%
Belgian	1	3%
Dutch	1	3%
Italian	1	3%
Portuguese	1	3%
Romanian	1	3%
Total	32	100%

大学別		
Current Affiliation (Institution)	No	Percentage
University of Cambridge	5	19%
University of Bristol	3	9%
Imperial College London	3	9%
The University of Nottingham	3	9%
University College London	3	9%
University of Bath	2	6%
Queen Mary, University of London	2	6%
University of Birmingham	1	3%
Cranfield University	1	3%
University of Leicester	1	3%
The University of Manchester	1	3%
Newcastle University	1	3%
University of Oxford	1	3%
University of Plymouth	1	3%
University of Southampton	1	3%
University of Sussex	1	3%
University of York	1	3%
Others	1	3%
Total	32	100%

人文・社会科学分野 (Humanities and Social Sciences)

国籍別		
Nationality	No	Percentage
British	2	50%
American	1	25%
Polish	1	25%
Total	4	100%

大学別		
Current Affiliation (Institution)	No	Percentage
University of Cambridge	1	25%
Newcastle University	1	25%
University of Oxford	1	25%
University of Warwick	1	25%
Total	4	100%

(吉川)

4. 在英日本人研究者関係

在英日本人研究者との打合せ

2010年5月24日、JSPS ロンドンにおいて在英日本人研究者との打合せが行われ、在英日本人研究者から UCL 大沼教授、University of Southampton 水田教授、Cancer Research UK 登田上級研究員、JSPS ロンドンから平松センター長、関口副センター長、Watson プログラム・コーディネーター、多田国際協力員が出席した。

まずはじめに、JSPS ロンドンの新規事業”JSPS London Symposium Scheme for Japanese Researchers Based in the UK”（在英日本人研究者対象日英シンポジウム開催スキーム）に関して、募集方法、申請・審査・開催スケジュール等の最終確認を行い、3名の研究者からは、申請者である研究者の立場から詳細なアドバイスをいただいた。

次に、JSPS ロンドンが、在英日本人研究者会議の開催や各種情報提供等を行っている在英日本人研究者のグループについて、ホームページの登録サイトを通じて登録制とする案を含め、今後の組織の在り方について、有用なご意見をいただいた。

最後に、日本の大学等研究機関の国際化についての意見交換が行われ、企業・大学等研究機関間の協力の可能性、日本人の若手研究者が海外に出やすい環境づくりの重要性等、研究者の立場からの率直な意見を伺う大変貴重な機会となった。



奥右から水田教授、大沼教授、登田上級研究員

(多田)

ロンドン管理業務事情コラム—小切手の支払い—



本センターでは支払いに主に小切手を使用しています。振出日・宛名・金額・金額の英語表記を全て手書きで書かなければいけないため、とても手間のかかる作業ですが、最近はいぶ慣れてきました。先生に旅費や謝金の支払いをする際も口座情報を提出いただく必要がないので、日本の大学でも導入すれば、例えば外国の研究者を招聘する際など、高額な手数料のかかる外国送金や盗まれる危険性のある現金手渡しに比べて、本人しか換金できない小切手の方が安全で便利ではないか、とさえ思うようになりました。

しかし小切手にも紛失のリスクはあります。紛失された場合には銀行に小切手停止の手続きをした上で再発行

しなければならず、停止手続きには手数料10ポンドがかかります。(参考 Newsletter No.17 ロンドン管理業務事情「小切手の紛失、郵便事故」)やはりどちらのシステムにも一長一短があるようです。

小切手に記載不備があった場合もやはり停止となり、手数料がかかります。先日宛名に不備があり10ポンドを取られてしまったので、今後はこのようなことがないように注意したいと思います。

小切手は副センター長がサインをして初めて有効となります。以前、サインが銀行に登録してあるものと違うということでやはり10ポンド取られてしまったことがあったそうです。偽造されないようチェックしてくれているのは安心とはいえ、本当に本人がサインしているので少々納得がいかないのですが、こちらについても気をつけて確認するようになりたいと思います。

(横山)

III. トピックス

1. 会議・講演会等出席

ドイツ・Merkel 首相 The Royal Society King Charles II Medal 受賞式

2010年4月12日、The Royal Society で開催されたドイツ・Merkel 首相の King Charles II Medal 受賞式に古川センター長が出席した。

King Charles II Medal は、科学研究に極めて顕著な貢献をした外国の元首または首脳に贈られる賞で、国際的に最も名誉ある賞の一つである。過去には 1998 年に日本の天皇陛下、2007 年にインドの Kalam 大統領が受賞しており、今回、ドイツの Merkel 首相が 3 人目の受賞者となった。Merkel 首相はドイツ、ヨーロッパさらには国際社会において顕著な科学技術政策を推し進めてきたことを評価された。

式では、The Royal Society の President である Lord Martin Rees of Ludlow PRS のスピーチの後、同氏より Merkel 首相にメダルが授与された。引き続き催されたレセ

プションでは、古川所長から直接 Merkel 首相に祝意を伝えた。また、The Royal Society の元職員や歴代の Foreign Secretary -Prof. Lorna Casselton (現職)、Dame Julia Higgins, Sir Brian Heap, Sir Jeffrey Allen- が出席されており、久しぶりに再会し、JSPS の小野理事長、佐藤前理事長、大崎元理事長、柳田博明初代ロンドン研究連絡センター長、佐藤國雄元同センター長の話題に及んだ。

【(参考)The Royal Society ウェブサイト】

<http://royalsociety.org/German-Chancellor-honoured-by-the-Royal-Society/>

(古川・多田)

The Royal Academy of Engineering 主催 PolicyNet General Election Sessions —Adam Afriyie 国会議員

2010年4月12日、Adam Afriyie MP をメインスピーカーとして迎えた The Royal Academy of Engineering 主催の PolicyNet General Election Sessions に古川センター長が出席した。Afriyie 氏は、野党影の科学技術大臣として科学・イノベーション政策に携わっている(当時)。

この集会は、来る 5 月 6 日の英国下院総選挙を目前にして、英国の 8 つの工学系学術機関連合 Engineering the future が発表した政策構想「Engineering the future - a vision for the future of UK engineering」に基づくものであり、英国政府機関、学術関係機関、在英各国大使館等から多数の参加があった。「Engineering the future - a vision for the future of UK engineering」では、経済・産業の革新こそが強い国家の形成に必要であり今世紀の大きなチャレンジであると述べられている。その主な要点は以下のとおりである。

- 1) ハイテク産業輸出振興のための世界クラスの科学技術教育の推進
- 2) ハイテク経済の成長
 - 主要ハイテク分野を定めて複数年予算をつける
- 3) エビデンスに基づく科学技術政策の策定
 - 欧州においてドイツに先行されている科学技術力を高める必要がある

【(参考)The Royal Academy of Engineering ウェブサイト】

http://www.raeng.org.uk/societygov/public_affairs/thefuture.htm



(左より)在英イタリア大使館科学参事官 Prof. Salvator Robe Amendolia, Adam Afriyie 国会議員、古川センター長

(古川・多田)

「グリーンマニュファクチャリングとエコイノベーション」シンポジウムの開催

2010年6月2日～3日、英国工学アカデミーと日本工学アカデミーによる「グリーンマニュファクチャリング」シンポジウムが開催された。シンポジウムには、日英両国の研究者が参加し、持続可能な低炭素社会の実現のために工学が果たす役割について活発な議論が交わされた。特に、地球温暖化の要因の一つである二酸化炭素排出量を削減するために、高等教育機関と産業界との連携の重要性や具体的な事例について多くの研究者が発表した。

本シンポジウムには、JSPS ロンドンから平松センター長と疋田アドバイザーが出席し、一日目終了後のレセプションで挨拶をした。挨拶では、環境問題など地球規模の課題を解決するためには、グローバルな視点が必要であること、シンポジウムで取り上げた課題について、国内外の学術機関が連携して協力することの重要性や、当該分野におけるJSPS が果たすべき役割について発言した。



シンポジウム開会時の様子



挨拶をする平松センター長

(疋田)

The Royal Asiatic Society 年次総会

2010年5月13日、The Royal Asiatic Society (RAS) 年次総会および引き続き行われた講演会およびレセプションに平松センター長が出席した。

RAS は、アジアに関する文化・文学・芸術等の研究振興を目的とした英国の学術機関であり、文献等を集めた資料室の提供や各種講演会の開催、学術雑誌の出版等を行っ

ている。JSPS ロンドンは RAS の建物の3階部分にオフィスを賃貸している。RAS と JSPS ロンドンは、同じ学術研究に携わる機関ということもあり、日頃から JSPS のシンポジウム等の開催の際にはご協力いただいております。また互いの行事に参加する等、親交が深い。

(平松・多田)

グレートブリテン・ササカワ財団設立 25 周年記念レセプション

2010年6月9日、グレートブリテン・ササカワ財団の設立25周年記念レセプションが在英日本大使館で開催され、約200人が出席した。JSPS ロンドンからは、平松センター長及び関口副センター長が招待を受けた。レセプションでは、グレートブリテン・ササカワ財団の事務局長の Stephen McEnally の司会で始まり、海老原大使、笹川陽平日本財団会長らの挨拶があった。日英交流の重要性や25年間

に渡り同交流のために様々な事業を展開してきた歴史と今後の抱負が紹介された。5月着任の平松センター長は積極的に日英関係者と交流し、ネットワークを広めた。

なお、同財団は研究者の支援も積極的に行っており、助成を受けた JSPS 英国同窓会員がポスターセッションを披露し、関係者の注目を集めていた。

(関口)

小野理事長 UCL 訪問

2010年6月23日、小野理事長が、University of College London を訪問し、UCL で活躍する4名の日本人研究者と意見交換を行った。JSPS ロンドンセンターから平松センター長、関口副センター長、横山国際協力員が同行した。

当日は大沼信一教授の案内のもとキャンパス視察を行い、大沼教授から全体に関する説明及び、UCL は生物・医学系に強く建物を拡充していること、現在世界中から優秀な学生を集めようとしているなどの説明がされた。また、山本講師、安川シニア・リサーチフェロー、山野教授の研究棟、研究室を訪問し、各先生から研究内容の詳細、UCL の研究環境などについての説明を受けた。



(左から)キャンパス内の長州ファイブの碑について説明を行う大沼教授、小野理事長、平松センター長

訪問した研究者の紹介は以下のとおり

大沼 信一 眼科学研究所 教授

山本 嘉幸 細胞学発生生物学科 講師

安川 武宏 生物医学研究科 ミトコンドリア

DNA グループ シニア・リサーチフェロー

山野 博之 がん研究所 教授

(ロンドンセンターとの関係補足:2008年3月に本センターが現在の所在地に移転した際の式典で、学長のマルカム・グラント教授が大学国際化に関する基調講演をおこなった。また、2010年3月には東北大学とUCLとの共催シンポジウムを実施している。)



(右から)研究室にて説明を行う山野教授、小野理事長、平松センター長、大沼教授

(横山)

Royal Society 350 周年記念式典

2010年6月23日、1660年に国王の勅旨により設立された Royal Society の 350 周年記念式典がテムズ川沿いの Royal Festival Hall で招待者約 2,000 人を集めて開催された。式典には JSPS 本部から小野理事長が招待を受け、平松センター長及び関口副センター長が同行した。式典は厳かな雰囲気の中、会長であるマーティン・リース伯爵の開会の挨拶で始まり、エリザベス女王、エジンバラ公爵、ウィリアム王子など王室からの参列があった。また、ウィリアム王子の Royal Society フェローへの入会式が執り行われ、同王子から科学に寄せる期待を込めたスピーチがあった。終始威厳と格式に満ちた式典は参加者全員による国歌斉唱で幕を閉じた。

引き続き同会場のオープンスペースで開催されたレセプションは、科学の理解増進を目的として Royal Society が毎年主催している「Summer Science Exhibition」の提示物、実演などを見学しながらの懇親の場となった。同レセプション

では、エリザベス女王が参加者との対話を楽しまれる中、小野理事長も直接お話しする機会に恵まれた。その他、工学・物理科学研究会議 (EPSRC) の David



(左から)C.N.R Rao 教授、小野理事長、平松センター長

Delpy 会長、Royal Society of Edinburgh の William

Duncan 会長、Royal Society のフェローであり、今回の式典でも来賓挨拶を行った C.N.R Rao 教授などと歓談した。

同日夕刻より、場所を Royal Society に移して夕食会が行われた。席上で、小野理事長は Royal Society の Lorna Casselton 副会長 (Foreign Secretary & Vice-President) と歓

談しお祝いの言葉を述べた。また、第一回野口英世賞受賞者である Brian Greenwood 教授 (ロンドン大学熱帯衛生医学大学院) らとも親睦を深めた。記念式典の一連行事を通じて多くの要人と接し、JSPS のプレゼンス向上を図る上でよい機会となった。



王立協会 350 周年記念式典 ウィリアム王子スピーチ



王立協会 350 周年記念式典夕食会 小野理事長とブライアン・グリーンウッド教授 (第 1 回野口英世賞受賞者)

(関口)

英国生活コラム—イギリス的住居事情



4月1日にイギリスに到着し、翌日から早速住居を探し始めた。予め日本から不動産業者と連絡を取り内覧の予約をしていたため、協力員3人共に1週間でそれぞれの住居に入居することが出来た。

こちらでは物件に食器や家具が備え付けられているため、入居時にインベントリーチェックという備品リストを作成する。インベントリーチェックには、大家、入居者と第三者(専門のエージェントや不動産業者)が立ち合い、フォークの本数やソファの小さなシミまで細かに記録する。退去時にこれと相違があった場合は保証金から修理代が引かれてしまうため、入居者にとっては重要な作業である。私の場合も不動産業者が細かいところまで指摘してくれたため安心していった。

ところが、入居が終わってカーテンを開けてみると、窓ガラスの端にひびが入っているのを見つけた。事前にシャワーの出方に至るまで細かくチェックしていたつもりだったが、まさか窓ガラスにひびが入った状態で物件が市場に出ているなんて思わなかった。早速不動産業者に連絡を入れるが、大家と直接やり取りするよとの返事。こちらの不動

産業者は本当に「契約に当たっての仲介」をするだけのようだ。幸い大家はとても親切で、すぐに手配をしてくれた。しかし、我が家の窓は日本のようなサッシではなく、木枠にガラスがはめられている。どうやって取り替えるのだろうかと少し不安になりつつ、仕事を休まないといけないので大家に日程を確認すると、「家に入らなくても交換できるから、いつも通り仕事に行ってくれていい。ただ、窓際にある家具や荷物はすべて遠くに移動させておいてほしい。」と言われた。この返事で、「ガラスを外から部屋の中にとたき割って外し、新しいガラスを入れるのだ」ということは想像がついた。自分がない間に家のガラスを割られるのにはとても抵抗があったが、その日は家を出る前に窓の下に新聞紙を敷きつめて家を出た。仕事中に大家から「Done!」と連絡があり終業後に急いで帰ると、ガラスはきれいに交換されていて、思ったよりも少ない量のガラスが新聞紙の上に散らばっていた。当然のことであるが、費用は大家持ちだった。

結果的には無事にガラスも入れ替わり全てが解決しているので何も問題がないが、その時はイギリス生活の洗礼を受けた気分が気が滅入りそうになった。今こうして記事を書いていても嘘のように思える話だが、このやり方に慣れると帰国時にはとてもおおらかな人間になっているかもしれない。

(吉川)

Parliamentary Links Day 「Science and the New Parliament」

2010年6月22日、英国議会下院(House of Commons)で開催された Parliamentary Links Day に JSPS ロンドンより平松センター長が出席した。

Parliamentary Links Day は、国会議員と The Royal Society of Chemistry (RSC) をはじめとする学術研究会メンバーとの交流を目的に毎年 RSC 主催で開催されている。今年のテーマは「Science and the New Parliament」で、午前中の講演では、国会議員や RSC、Royal Society 会長等か

ら新政府が科学技術政策にどのように取り組むべきか様々な提言がなされ、続いての昼食会では活発な意見交換がなされた。政権交代後の初当選の議員にとっては研究者の生の声を聞くことができる格好の機会となった。

なお、この日の午後に政府の緊急予算案が発表される予定であったため、このイベントには立ち見が出るほど多くの人が集まっていた。

(平松・多田)

2. 関係者との会談

Royal Society of Edinburgh 会長との会談

2010年4月28日、Royal Society of Edinburgh の William Duncan 会長が古川センター長を訪問し、関口副センター長とワトソンプログラムディネータが同席した。Royal Society of Edinburgh はスコットランドの研究者を対象としたアカデミーである。研究分野に制限はなく全分野を対象としている。なお、Royal Society とは独立した機関ではあるが、British Academy なども含め友好的な関係を築いている。

会談では、Duncan 会長から、Royal Society of Edinburgh が推進する国際プログラム(若手研究者短期交流プログラム、ワークショップ開催プログラム、NSFC(中国)との共同研究プログラム)の概要説明があり、JSPS との共同研究スキーム構築に強い関心がある旨話があった。古川センター長からも JSPS が持つフェローシッププログラム、二国間交流事業などの説明があり、今後の関係強化のために重要な意見交換の場となった。

(関口)

Information Exchange Meeting at the British Academy

24th June 2010, Professor Kozo Hiramatsu, Director of JSPS London, met for the first time with Ms. Jane Lyddon, Head of International Relations and Ms. Sharon Strange, International Relations Manager for Asia) of the British Academy, at their premises. Professor Hiramatsu gave information about current developments at JSPS and the recent work of JSPS London and Ms. Lyddon talked about the challenges ahead for the British Academy because of the 25% budget cut the new coalition government is expecting to be made over the next four years. She said in particular that the Big Development Grant will be cut because their remit overlaps with other Research Councils in the UK and that the number of Post Doctoral Fellowships would be decreased. She also said that the British Academy will be

concentrating on trouble hot spots and development areas where they have never worked before, such as in Africa, Latin America and the Caribbean. Furthermore, the British Academy will have some difficult decisions to make about where to cut the budget in the running costs of their institutes in the Middle East such as in Rome, Athens, Ankara, Jerusalem, Nairobi and Tehran, which represent a long history of British archaeological interest.

Ms. Lyddon finally gave information about the British Academy's newly established Policy Centre which will be used to influence EU Framework Policy and gather more funding available from there for UK researchers.

(Watson)

Meeting at the British Library

At the British Library on 24th June 2010, Professor Kozo Hiramatsu, Director of JSPS London met with the Dr. Lee-Ann Coleman, Head of Scientific, Technical and Medical Information and Dr. Allan Sudlow, Relationships Manager, Science, Technology and Medicine. Professor Hiramatsu passed information to the British Library about the funding schemes JSPS has to offer, including individual fellowships, group-to-group and institutional level funding. In return, Drs. Coleman and Sudlow explained about the information in their archives, not only in book form, but also data

collections and sound archives. They also have a successful outreach programme for biomedical and health science researchers run through their recently established Research Information Centre. This meeting was important in not only making first contact but also exchanging information about the work of JSPS and the British Library and discovering possibilities for the two organisations to work together in the future.

(Watson)

IV. 在英政府関連団体連絡協議会

ロンドン政府系法人勉強会

2ヶ月に一度開催されているロンドン政府系法人のオフィス管理担当者による勉強会が、2010年4月22日、(独)国際交流基金で行われた。今回は、事業仕分け(行政刷新会議)への各法人の対応を中心に意見交換が行われた。

今後ともこの会議に積極的に参加し、有効な情報交換の場としたい。

(関口)

広報連絡会議

2010年5月28日、ロンドンの日本政府系機関等の所長級会合である広報連絡会議が、在英日本国大使館にて開催され、平松センター長が出席した。この会議は、在ロンドン政府系機関の相互情報連絡を目的に、隔月で開催されているものである。各機関から活動状況について報告があり、今後の共同企画についての活発な意見交換が行われた。

次回は7月に国際観光振興機構(JNTO)にて開催予定である。

- ・ 在英日本商工会議所(JCCI UK) 花岡事務総長
- ・ 日本貿易振興機構(JETRO) 栗山副所長
- ・ 日本クラブ 山本事務局長
- ・ 日本航空(JAL)ロンドン支店 アスロン営業所長
- ・ 国際交流基金(Japan Foundation) 石田所長
- ・ 自治体国際化協会(CLAIR) 藤島所長
- ・ 在英国日本大使館 岡庭公使
- ・ 国際観光振興機構(JNTO) 吉田所長
- ・ 日本学術振興会(JSPS) 平松センター長
- ・ 日本スポーツ振興センター(NAASH) 高橋所長

(多田)

V. アドバイザー・国際協力員の着任

ロンドンセンターに、4月6日多田里奈国際協力員、横山明子国際協力員、吉川かおり国際協力員が着任した。また4月14日、疋田陽子アドバイザーが着任した。

(左より)横山国際協力員、吉川国際協力員、疋田アドバイザー、多田国際協力員



●英国学術調査報告

I. 政府の学術関連政策の動向

1. ビジネス・イノベーション・技能省(BIS)

新政権発足

5月6日に総選挙が行われ、5月12日に保守党・自由民主党の連立政権による組閣が行われた。ビジネス・イノベーション・技能大臣には、自由民主党のヴィンス・ケーブル下院議員、大学・科学担当大臣には、保守党のデビッド・ウィレット下院議員が指名。ウィレット下院議員は、野党時代、影の大学・科学大臣に任命されていた。

【ケーブル BIS 大臣の略歴(BIS の HP より)】

<http://www.bis.gov.uk/ministers/vince-cable>

【ウィレット大臣の略歴(BIS の HP より)】

<http://www.bis.gov.uk/ministers/david-willetts>

デビッド・ウィレット下院議員の初めての基調講演

5月20日、ウィレット下院議員がバーミンガム大学(※バーミンガムはウィレット下院議員の出身地)で基調講演を行った。高等教育に関する主な発言内容は以下の通り。

ヴィンス・ケーブル BIS 大臣と私(ウィレット下院議員)は、高等教育、社会人教育の長所、厳格性をサポートすることで、官僚的な管理を排除し、大学と産業界とのパートナーシップを育成することに取り組むこととした。

また、他にも以下の事項に言及した。

- ・ 英国の大学の長所は自立からもたらされる
- ・ 学術的な学問でも、職業教育的な学問でも、厳密な基準と優秀さが求められる

- ・ 大学の研究が英国経済に与える有益な効果は非常に重要であるが、「Research Excellence Framework」の指標については懐疑的である
- ・ 英国の技術者層の育成は重要である
- ・ 政府は優れたレベルの実習制度を含め、高等教育機関等への幅広いアクセスを可能にすべき

【BIS の関係 URL】

<http://www.bis.gov.uk/news/speeches/david-willetts-keynote-speech>

大学・カレッジへの予算削減に関する協力要請

5月27日、ケーブル大臣とウィレット下院議員は、政府が示した2010-11年予算凍結に関し、大学の学長・カレッジの校長に協力を要請した。要請の主な観点は以下の通り。

- ・ 給料・ボーナスの抑制。
- ・ 新規募集の凍結を含む、節約できる事項への速やかな取組。
- ・ ITプロジェクト、建物の建設、コンサルタント料、旅費、接客と市場調査にかかる費用など自由裁量経費の削減。

【BIS の関係 URL】

<http://www.bis.gov.uk/news/topstories/2010/May/letter-to-vc-and-principals>

※上記 URL の中に、ケーブル大臣とウィレット下院議員から各大学の学長及び校長宛てた書簡状(pdf ファイル)へのリンクが貼られています。

ウィレット下院議員が、「宇宙リーダーシップ委員会(Space Leadership Council)」を立ち上げ

5月28日、BIS のウィレット下院議員は、新しく設立される英国宇宙庁(UK Space Agency)に戦略的な助言をするため、

産業界、学術界出身者からなる「宇宙リーダーシップ委員会」を発足した。

委員長であるウィレット大臣は、宇宙分野には将来的な展望がある(高い技術を持った研究者や技術者の雇用、最先端の革新技術の国際的な市場へのアピールなど)とし、宇宙科学分野において、英国が世界を牽引し続けるためには、多くのことをなすべきであるとした。また、共同委員長である、アンディ・グリーン Logica 最高責任者は、宇宙分野が 2030 年までに £4000 億の市場になることが想定され

るとし、「宇宙リーダーシップ委員会」は英国経済成長を支援する戦略の機動力となる旨の発言をした。

【BIS プレスリリース】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=413555&NewsAreaID=2>

ケーブル大臣の初めての講演

6月3日、ケーブル大臣はカス・ビジネススクールにおいて、就任後初めての講演を行った。講演では、より良い経済発展のために、高等教育機関が将来への安定した基盤となるための役割を担うことについて言及したほか、生涯学習の推進、社会人教育に関する官僚制度の撤廃や技術者養成を重点化することについて述べた。

また、BIS が大学政策、技術政策、経済政策、科学研究政策などを所管することで効率的に経済成長につながることも言及した。

【BIS の関係 URL】

http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=413641&NewsAreaID=2&utm_source=feedburner&utm_medium=feed&utm_campaign=Feed%3A+bis-news+%28BIS+News%29&utm_content=FeedBurner

ウィレット大臣の基調講演

6月10日、ウィレット大臣は、オックスフォード・ブルックス大学で大学の改革に関する講演を行った。

講演では、高等教育における2つの問題点、①優れた教授方法は普遍的なものではないこと、②現在の財政モデル、を挙げ、現在の財政モデルでは優れた教授方法に対して報酬を与える余裕がない旨の発言をした。

また、そのほか、主に以下の点について述べた。

- ・ 高等教育機関における職業訓練に関する機能の重視。

- ・ 学生たちが進路を選択する際の参考になるような情報の公開。
- ・ 外部学位取得制度の適用の拡大。
- ・ 大学の質の向上。

【BIS の関係 URL】

<http://www.bis.gov.uk/news/speeches/david-willetts-oxford-brookes-university-challenge>

経営者や学習者の意向を反映した新しいスキルを獲得するための戦略

6月17日、ジョン・ヘイズ社会人教育・技術・生涯学習担当大臣は、不要な官僚主義から脱却し、かつ過剰な書類作成等に関する事務量を削減することにより、カレッジが経営者や学習者の要求を満たすことができるような戦略の実施について述べた。

ヘイズ大臣が示した指針は以下の通り。

- ・ すべてのカレッジは、効果の薄い活動から離れて、地域からの要求に応じられるようにすること。
- ・ 政府は、成果が薄れているのかかわらず、過剰な Ofsted inspection の要求を排除するようにすること。

- ・ 「Summary Statement of Activity」(各カレッジが作成している目標)を実施するための過剰な要求を排除すること。
- ・ 政府は「Principle Qualifying Programme」を実施するための事務的な規制を排除すること。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=413905&NewsAreaID=2>

社会人教育を行うカレッジが£50 百万規模のプロジェクトに参加

6月21日、BISは、社会人教育を行うカレッジが£50百万のプロジェクトに参加する機会を得たことを発表した。£50百万のうち£30百万は、学習している若者が利益を得られるようにするため、150のカレッジに約£225,000ずつ配分される。残りの£20百万は、公募によって、魅力的な学校づくりをするカレッジに£100万ずつ配分される。£225,000を配分する目的は、民間企業等の連携を図るための資金増加や実施プロジェクトの規模拡大すること、

£20万を配分する目的は、民間企業等の連携を図るための投資を増加することにある。

ヘイズ大臣は、この追加資金によって多くのカレッジが利益を受け、英国のカレッジに大きな変化をもたらすものになるだろうと述べている。

【BISの関係URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=413974&NewsAreaID=2>

2. 財務省

政府は2010-11年予算の一部凍結を発表

5月24日、英国政府は赤字削減のため2010-11年の予算の一部である£62億を凍結すると発表した。£62億のうち、BISの負担額は£836百万となっている。BISでは、2009年12月に配分した高等教育機関の定員20,000人分の補助金のうち、未配分となっている10,000人分の補助金は確保する一方、高等教育予算から£200百万を削減することとした。

【財務省のURL】

http://www.hm-treasury.gov.uk/psr_reducing_government_deficit.htm

【BISの関係URL】

<http://www.bis.gov.uk/news/topstories/2010/May/BIS-savings>

II. 学術振興機関の研究施策の動向

1. 英国研究会議(RCUK)

産学連携会議(Council for Industry and Higher Education(CIHE))が公表した産学連携の効果に関する報告書

5月20日、CIHEは、産学連携が英国社会と経済にどのような効果を与えるかについて報告書を公表した。報告書「研究成果の理解:産業や市場革新における大学研究の役割(Absorbing Research: The role of university research in business and market innovation)」では、産学間において、知識の交換を成し遂げようとするれば、産業側(企業)を最大限に活用し、研究成果の獲得と理解を得ることができることを述べている。また、商業ベースの技術には、若手研究者

のキャリア育成のプログラムを組み込むべきとし、彼らがより効率的に連携できるようにすることを提案している。このほか、RCUKが優れた研究を支援しつづけ、世界中の企業を魅了し、これら企業と英国の学術機関の協力を促進することを提案した。

【RCUKの関係URL】

<http://www.rcuk.ac.uk/news/100520.htm>

2010-2011年の奨学金の限度額公表

5月23日、RCUKは、RCUKが負担する2010-11年の奨学金について公表した。7つのリサーチカウンシルでは、約19,000人の博士課程に在籍する学生に支援を行っている。

2005年における奨学金の下限額は、大卒の初任給と同程度であり、インフレの中で年々上昇している。

- ・ RCUKが大学院生に支払う奨学金の上限額: £3,466。
- ・ RCUKが支援する博士課程在籍者への奨学金の下限額: £13,590(1年につき)。

【RCUKのプレスリリース】

http://www.rcuk.ac.uk/news/100513_2.htm

英国研究会議(RCUK)と英国大学協会(UUK)は、英国高等教育機関において研究費にかかる経済的な費用に関する評価について所見を発表

6月24日、RCUKとUUKは、2009年11月に発刊された経済的なコストにかかる評価を実施した結果について所見を発表した。「英国高等教育機関における研究にかかる経済コストの財政的な持続性と効率性」では、高等教育において、重要性は、公的資金にかかる透明性と効率性が重要だとし、英国の高等教育機関は、重要な分野を分野横断的に網羅しているとしている。

UUKは、高等教育機関が英国経済へ直接的に£590億の貢献を行っている証明をしたとし、その貢献額は航空宇宙、農業や製薬産業よりも大きいとしている。一方、どの分野も現在の厳しい経済状況を受けているとし、より効率性を求められるとしている。

なお、この結果を実施するためにタスクグループが設置されている。タスクグループの狙いは、英国高等教育機関が研究に対する持続的な経済的支援を行うための追加的な財政資金に関して、明確な見通しを確立することにある。

本報告書では、以下の事項が主な提案事項として挙げられている。

- ・ 間接経費を次の3年間に年間5%ずつ削減すること。間接経費の割合が2010-11年において£38,700以下の機関は、年間2.5%削減すること。
- ・ リサーチカウンシルからの助成額における間接経費の額は、年間5%ずつ削減すること(間接経費が平均額より下回っている期間は、2.5%)。
- ・ 2010-11年の間接経費が上位四分位点(£42,500/FTE(正規職員))を越えている場合、速くコストを削減するため、リサーチカウンシルの計画に同意しなければならない。
- ・ 既存の研究成果等を利用して、リサーチカウンシルは、評価や研究の拡大を行うこと。

【RCUKの関係URL】

<http://www.rcuk.ac.uk/news/uukheireport.htm>

2. 英国バイオテクノロジー・生物科学研究会議(BBSRC)

生物科学分野における英国-欧州の共同研究の実施について

5月19日、BBSRCは、抗生物質を産生するための新しいアプローチや細胞生物学を研究するための革新的な技術など、生物科学の工学分野への活用に関する英国・欧州間の4件の共同研究を実施することを発表した。

このプロジェクトは、BBSRC、EPSRC(工学・自然科学研究会議)がESF(欧州科学財団)の欧州共同研究枠組(EUROCORES)の下で£1.5百万をかけて実施するもの。今回、採択された機関は以下の通り

- ・ リチャード・ベリー博士(オックスフォード大学)
プロジェクト名: NANOCELL
予算規模: £354K (BBSRC: £177K、EPSRC: £177K)
参加機関: ドレスデン工科大学、マックスプランク協会など7機関
フィリップ・ホリジャー博士(MRCケンブリッジセンター)
プロジェクト名: SYNAPTA: 人口遺伝システムと新世代の応用
予算規模: £304K (BBSRC: £152K、EPSRC: £152K)

参加機関: ルーヴアンカソリック大学、ボン大学、ジノスコープ

- ・ ディビット・シャラッテ博士(オックスフォード大学)
プロジェクト名: 細菌性細胞分裂における合成生物
予算規模: £394K (BBSRC: £355K、EPSRC: £39K)
参加機関: ドレスデン工科大学、デルフト工科大学
- ・ ニコラス・スジタ博士(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)
プロジェクト名: マイクロ流体システムにおける多孔質集合の特性化
予算規模: £403K (BBSRC: £363K、EPSRC: £40K)
参加機関: グローニンゲン大学、スイス連邦工科大学チューリッヒ校など5機関

【BBSRCのプレスリリース】

<http://www.bbsrc.ac.uk/media/releases/2010/100519-uk-europe-collaborations.aspx>

3. 医学研究会議(MRC)

医学研究会議(MRC)が、カナダとドイツと神経変性研究分野において国際協力を開始

6月29日、MRC、ドイツ神経変性疾患センターとカナダ衛生研究機関は、新たに神経変性研究のための国際協力をベルリンで開始することとした。このプロジェクトの目的は、神経変性疾患の解明を進め、新しい治療方法の確立を支援することにある。プロジェクトの実施期間は3年間、規模は£3百万となっている。この3機関は、高齢化社会を迎

え、神経変性疾患の負担が増加している現状に取り組むための国際協力の重要性について強調している。

【MRCの関係 URL】

<http://www.mrc.ac.uk/Newspublications/News/MRC006938>

III. 高等教育助成機関及び関連機関・団体の動向

1. 英国高等教育財政会議(HEFCE)

高等教育機関の産学連携に関する調査

6月14日、HEFCEは高等教育機関の産学連携に関する調査(The Annual Higher Education-Business and Community Interaction (HE-BCI))に関する結果を発表した。調査結果によると、産学連携による収入は5.5%増加し、2009年にはほぼ£30億となる。主なポイントは以下の通り。

- ・ 高等教育機関によって設立された会社数は、29%増加し、大学内に設立された会社は4%増加した。
- ・ 技術者継続教育(Continuing professional development(CPD))の収入は4%増加し、£559百万となった。

- ・ 公的セクター、第3セクターが高等教育機関への支出額が増加(共同研究がおおよそ5%増加、契約研究が12%増加)。
- ・ 知的財産に関する収入とスピノフの会社の売り上げがおおよそ2倍になった(£66百万から£124百万へ増加)。

【HEFCEの関係 URL】

<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/hebci.htm>

多くの生徒への財政的支援

6月24日、HEFCEはより多くの生徒への財政支援を行うことを発表した。HEFCEは、大学現代化基金(UMF:University Modernization Fund)を通じて、£152百万を配分する。配分額のうち、£132百万は、2010-11年の追加定員10,000人分として大学・カレッジに配分される。10,000人の内訳は、全日制の定員約8,000人、パートタイムの定員約2,000人となっている。

残額の£20百万は大学等へ利益を生むことが想定される重点分野に配分される。

また、多くの学生に理工学系分野(科学、技術、工学、数学など)を学習する支援策として、£4百万を支出し、全日制の定員1,712人分を確保する見込みとなっている。

【HEFCEの関係 URL】

<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/umf.htm>

2010-11年の定員及び財政的支援

6月24日、HEFCEはBISのケーブル大臣から改定された交付金に関する通知を受け取ったことを発表した。通知は、2009年12月22日に発出された通知の内容を変更し、本年5月24日に発表された2010-11年予算を政府全体で£62億節約する趣旨に沿ったもの。

具体的な数字としては、全体額は£7,291百万から£7,361百万と£70百万増加している(いずれの数値も追加の財政支援額は含んでいない)。

なお、追加の財政支援額として、社会人教育へ配分するために£48百万が配分される。

交付金に関する増減額の内訳	
支出項目	増減額
教育のための経常的支出 ※2010-11年追加定員分、UMFを通じて配分	£ 132 百万 増
教育のための経常的支出 ※5月24日の予算減額に沿った基準額の減額	£ 52 百万 減
一般的な補助金にかかる支出額 ※5月24日の予算減額に沿った基準額の減額	£ 30 百万 減
UMFを通じた重点施策の実施	£ 20 百万 増
合計	£ 70 百万 増

増減は、2009年12月時点と今回の改訂時の数値を比較

2. ウェールズ高等教育財政会議(HEFCW)

大学が地方のニーズに対して果たす責任

ウェールズに位置する大学は、学習者及び経営者のために高等教育へのアクセス拡大を率先して進めている。地域の中で学校、コミュニティ、職場と社会人教育から高等教育への明確な方向性を示しつつ、学習者のニーズと優先順位付けを認識している。

【HEFCW の関係 URL】

http://www.hefcw.ac.uk/documents/news/press_releases/2010%20Press%20Releases/02%2006%2010%20Universities%20show%20responsiveness%20to%20local%20needs%20-%20English.pdf

高等教育に関する新戦略について

6月29日、HEFCWは、2013年までの高等教育に関する新戦略(HEFCW Corporate Strategy)を発表した。新戦略では、大学や社会人教育のためのカレッジが一体となって、高等教育で学習する人々の利益が増すこと、財政会議としては、研究成果が拡大し、利用者その他の受益者の関係が強化することを目的としている。

【HEFCW の関係 URL】

http://www.hefcw.ac.uk/documents/news/press_releases/2010%20Press%20Releases/New%20directions%20for%20higher%20education%20in%20Wales%20-%20English.pdf

※新戦略が掲載されている URL

http://www.hefcw.ac.uk/publications/corporate_documents/corporate_strategy_plan.aspx

3. スコットランド財政会議(SFC)

2010・11年度の高等教育機関の支援

4月23日、SFCは、2010・2011年度の高等教育機関を支援する£16.2百万の追加支援先を決定。£16.2百万のうち、£6.7百万はヨーロッパ社会財団(European Social Funds)が支出し、残りの£9.5百万はSFCが支出。

【SFC の関係 URL】

http://www.sfc.ac.uk/web/FILES/PressReleases_SFCPR062010/SFCPR062010_Colleges_to_share_additional_%c2%a316.2_million_for_extra_student_places_23_April_2010.pdf

カレッジを活用したスコットランドの経済対策

5月21日、SFCは、スコットランドの経済低迷の対策のため、特に地方のカレッジに£100百万を配分することとした。分配される18のカレッジは遠隔地か島嶼に位置している。

【SFCの関係 URL】

http://www.sfc.ac.uk/web/FILES/PressReleases_SFCPR102010_Ruralcollegestobenefitfrom1milliontoprovidenewlearning/SFCPR102010.pdf

スコットランド財政会議がビジネス・イノベーション・スキームを促進

6月23日、SFCは大学が中小企業と協力するための取組に対し、支援額を£300,000から£500,000へ増額する旨の発表をした。この取組は、2009年から開始されており、初めての評価では、本取組が大学と企業の知識移転を促進しているとの回答者が95%にも上った。ジョン・マックランド SFC議長は、中小企業はスコットランド経済に重要な役割を果たしており、このスキームは、大学と企業との新しい協力枠組みを支援するもの、とコメントした。

【SFCの関係 URL】

http://www.sfc.ac.uk/news_events_circulars/mediacentre/press_releases/2010/SFCPR112010.aspx

4. 高等教育統計局(HESA)

高等教育機関の資産に関する報告書について

5月27日、HESAは2008/09年の高等教育機関の資産に関する報告書(Resources of Higher Education Institute2008/09)を発表した。

報告書によれば、無期限及び常勤の雇用契約を結んでいる職員は、2004/05年と比較して8%増加した。女性の任期付職員は過去5年間、男性の任期付職員よりも多く雇用されている。

また、任期付の研究のみに従事する職員数は、2004-05年から2008-09年で15%減少している。なお、同期間で指導のみに従事する職員数も13.7%減少している。

その他、2008/09年は30歳以下の大学職員は3/4が任期付職員となっている。この年齢グループの過半数(52.5%)は研究のみに従事する職員。一方、41歳以上の大学職員は3/4以上が契約職員及び常勤職員。

【HESAの関係 URL】

<http://www.hesa.ac.uk/index.php/content/view/1730/161/>

5. ラッセルグループ

英国の大学が国際的に優位に立つことの重要性

5月14日、ラッセルグループは、英国が競争力を増し、経済成長を遂げるためには英国内の大学が世界を牽引する機関であることが重要であり、より多くの経費が必要である旨の報告書(Staying on top: The challenge of sustaining world-class higher education in the UK)を発表した。

主な内容は以下の通り。

- 英国の経済成長はハイテク産業や大学卒業者の技術等に頼っており、研究を重視している一流大学は将来的な成長と富の推進に極めて重要である。
- 英国の大学は厳しい財政下で不確定要素が多いが、アメリカ、ドイツ、フランス、中国などは高等教育機関への投資を重視している。

- 2000年からの高等教育への投資の増加は、生徒の学習経験などを支援する一方、国際的に重要な研究の支援等にもつながった。現在の大学は費用の高騰等の問題に直面しており、生徒に最善の教育を与えるための設備に関する費用などが必要となっている。
- 政府からの予算配分の削減が行われる中、大学としての収入増が見込めない状況で、これまで膨大な数の人類の生活を改善することに貢献し、幾多の学生を優れた医師、技術者、企業家に育て上げた学者や教師たちが失われていく。
- 英国の高等教育の質の高さは、この国の持つ強みの一つである。しかし、不安定な状況下では、際立った分野

の保護だけではなく、英国の将来的な国家の繁栄を危機にさらすものである。

【Russell Group のプレスリリース】

<http://www.russellgroup.ac.uk/russell-group-latest-news/121-2010/4236international-standing-of-uk-universities-under-threat--russell-group/>

英国高等教育機関の将来のために、卒業生が行う貢献

5月17日、ラッセルグループは、英国の高等教育機関が将来的に活力を持ち続けるための報告書(Staying on top: The challenge of sustaining world-class higher education in the UK)を発表した。報告書の中で、英国の大学が世界を牽引するためには、更なる追加支援が必要としている。また、大学卒業生が(卒業による)財政的な利益等を得ることから、卒業生の大学への財政面での貢献が、大学の財政面での不足を補うための、公正かつ実行可能な選択であるとしている。ウェンディ・ピアット局長は、卒業生が財政的支

援を行う制度について、多くの解決すべき点はあるが、納税者から見れば望ましい。

【Russell Group のプレスリリース】

<http://www.russellgroup.ac.uk/russell-group-latest-news/121-2010/4237-graduate-contributions-vital-to-future-of-uk-higher-education/>

IV. 大学等研究機関の紹介

University College London							
基本データ	設立	教員数	学生数		留学生数	The Times Good University Guide 2010	RAE2008
			学部生	大学院生			
	1826年	約4,000人	21,210人	12,415人	7,125人	7位	7位
URL	http://www.ucl.ac.uk/						
特徴	<ul style="list-style-type: none"> THE-QS World University Rankings(2009)4位。 ラッセルグループの一員。 ノーベル賞受賞者21人。 140以上の国・地域から学生を受け入れている。 哲学者のジェレミー・ベンサムを建学の父と仰いでいる。 建学当初から、人種、階級や宗教等による入学差別を行わず、男子学生と同じ基準で女性学生を受け入れるなど、革新的な校風を持つ。 1863年に5人の日本人学生(伊藤博文、井上勝、井上馨、遠藤勤助、山尾庸三)がUCLに留学し、帰国後日本の近代化に貢献した。現在敷地内に長州ファイブ(Choshu Five)として顕彰碑が建てられている。 						

The University of Manchester							
基本データ	設立	教員数	学生数		留学生数	The Times Good University Guide 2010	RAE2008
			学部生	大学院生			
	1824年	約 5,800人	27,645人	10,545人	8,800人	30位	8位
URL	http://www.manchester.ac.uk/						
特徴	<ul style="list-style-type: none"> THE-QS World University Rankings(2009)26位。 ラッセルグループの一員。 ノーベル賞受賞者 23人。 180以上の国・地域から学生を受け入れている。 1824年に UMIST (マンチェスター工科大学)が設立され、その後 1851年に The Victoria University of Manchester が設立されたが、2004年 10月に1つの大学として合併された。 2015年までに世界で 25位以内にランク付けされることを目指している。 2008年度、学部課程への出願数が英国内の大学で最も多かった。 						

University of Southampton							
基本データ	設立	教員数	学生数		留学生数	The Times Good University Guide 2010	RAE2008
			学部生	大学院生			
	1862年	2,314人	16,800人	5,880人	4,300人	19位	14位
URL	http://www.southampton.ac.uk/						
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ラッセルグループの一員。 WUN (Worldwide Universities Network)のメンバー。 the Hartley Institution として開校し、1902年に University of London の分校扱いで Hartley University College となった後、1952年に独立した大学となる。 研究に重点が置かれており、研究活動からの収入の比率が高い。 工学分野に強みがあり、RAE2008 ではトップ 10 入りした。2010 The Times Good University Guide では aeronautical & manufacturing engineering, civil engineering, electrical engineering and mechanical engineering の 4 分野がトップ 10 入りしている。 1996年、130年の歴史を持つ Winchester School of Art が加入した。 						

※学生数および留学生数は、Higher Education Statistics Agency online statistics 内 student data (2008/09)を参照。

●業務日程

4月

- 1日 元 Royal Society 職員 現 Chinese Academy of Science 職員 Ling Thompson 氏との昼食会(古川)
King Charles II Medal アンジェラ・メルケル独首相授賞式出席(於 Royal Society)(古川)
- 6日 House of Commons 往訪(古川)
多田・横山・吉川国際協力員着任
UK-JSPS Alumni Awards: FURUSATO and BRIDGE 申請締切
- 8日 Dr Hans Hagen, Senior Manager, International Grant Section, Royal Society との昼食会(古川)
京都大学産官学連携欧州事務所 野村教授との夕食会(古川)
- 9日 Dr Mike Winter OBE, Director, International Affairs, Institute of Education との昼食会(古川)
IT 打ち合わせ(関口)
- 10日 Dr. Chizu Nakajima, City University との打合せ(古川)
- 12日 国立情報学研究所 安達教授・山地准教授来訪(古川、関口)
PolicyNet General Election Sessions(スピーカー: Adam Afriyie 国会議員)出席(於 Royal Academy of Engineering)(古川)
- 13日 次期センター長 平松教授への引継ぎ等(～16日)
- | | |
|-----|--|
| 13日 | ・業務引継ぎ等(古川、関口) |
| 14日 | ・センター長交代挨拶(古川、平松)
国際交流基金(Japan Foundation)ロンドン事務所 石田所長、日本貿易振興機構(JETRO)ロンドン
センター船木所長・江口次長・栗山次長、自治体国際化協会(JLGC)ロンドン事務所 藤島所長、
在英日本国大使館 草賀総括公使・岡同公使・岡庭同公使、日本スポーツ振興センター(NAASH)
ロンドン事務所 高橋所長 往訪 |
| 15日 | ・センター長交代挨拶(古川、平松)
国際観光振興機構(JNTO)ロンドン観光宣伝事務所 吉田所長往訪
京都大学産官学連携欧州事務所 野村教授来訪
ロンドン医療センター澤田マネージャー来訪 |
- クロスメディア 丸山氏との打ち合わせ(古川)
- Royal Academy of Engineering 主催 The 2010 Lloyd's Register Educational Trust Lecture and Dinner 出席(於 Royal Society of Medicine)(古川)
- 14日 疋田アドバイザー着任
- 16日 UK-JSPS Alumni Awards: FURUSATO and BRIDGE 選考会(古川、関口、Watson)
- 19日 Dr. Peter Norrey, STFC との昼食会(古川)
リコー 河野氏来訪(関口)
- 20日 グラスゴー大学戸田 International Business Liaison Manager 来訪
Dr. Joachim Scholz, The Senckenberg Natural History Museum and Research Institute, Germany 来訪(古川、関口、
Watson)
着任挨拶(NAASH ロンドン事務所往訪)(疋田、多田、横山、吉川)
- 21日 Cultural Studies and Cultural Industries in Northeast Asia: What a Difference a Region Makes(於 Japan
Foundation)(古川)
- 22日 政府系法人勉強会(於 Japan Foundation)(関口)
着任挨拶(在英日本国大使館、JETRO ロンドン事務所往訪)(疋田、多田、横山、吉川)
- 23日 UCL 大沼教授来訪・打合せ(古川、関口)

- 26日 The British Academyとの打合せ(古川、関口、Watson)
HIV, TB and Malaria 10 years on from the Millenium Development Goals 出席 (於 House of Lords)(古川)
法政セミナー(於 Daiwa Japan House)(疋田、Winkler)
- 27日 在英日本大使館主催「Information Day at the Embassy of Japan in London」における事業説明(於在英大)(関口、横山)
JSPS ロンドンネットワークワーキング・イベント(全員)
- 28日 Dr. William Duncan, CEO, Royal Society of Edinburgh 来訪(古川、関口、Watson)
LSHTM: FST Meeting " Is the science education system supplying the skills that the UK wants?" 出席 (於 Royal Society)(古川、関口)
- 29日 Daiwa Anglo-Japanese Foundation 往訪(古川)
オフィス IT 関係打合せ(関口)
- 30日 在英日本人研究者との打合せ(古川、関口)

5月

- 6日 Prof.Marie Conte-Helm, Director General, Daiwa Anglo-Japanese Foundation との打合せ(於 National Portrait Gallery)(古川)
古川センター長ロンドンセンター送別会(全員)
- 7日 JETRO ロンドン・グラスゴー大学共催「Japan Day」参加および事業説明(於グラスゴー大学)(関口、多田)
- 10日 JSPS 英国同窓会員地域マネージャー会議(古川、関口、Watson)
- 11日 平松センター長着任
- 12日 オフィス IT 関係打合せ(関口)
- 13日 The Royal Asiatic Society Annual General Meeting Lecture & Reception 出席(於 The Royal Asiatic Society)(平松、Winkler)
オフィス IT 関係打合せ(関口)
- 18日 FST Meeting "The Hauser Review of the UK Science and Innovation System"出席(於 The Royal Society)(平松、関口)
- 19日 UCL Nick Tyler 土木学部長、藤山 拓先生、Catherine Holloway 氏(元 Fellow)来訪(平松、関口、Watson)
- 21日 平松センター長ロンドンセンター歓迎会(全員)
- 23日 日英博覧会 100周年記念および日本クラブ創立 50周年記念式典出席(於 Hammersmith Park 内日本庭園)(平松)
- 24日 在英日本人研究者とのシンポジウム開催スキーム打ち合わせ(平松、関口、Watson、多田)
- 25日 Japan Foundation 扇田昭彦氏講演出席(於 Japan Foundation)(平松)
- 26日 Japan Foundation 東俊之氏講演出席(於 Japan Foundation)(平松)
- 27日 外国人特別研究員プレデパーチャーセミナーおよび同窓会イベント(全員)
- 28日 広報連絡会議出席(於在英大)(平松)

6月

- 1日 外国人特別研究員(欧米短期)申請締切
- 2日 The Royal Academy of Engineering ・The Engineering Academy of Japan 共催シンポジウム出席およびレセプションにおいて講演(於 Royal Academy of Engineering)(平松、疋田)
同窓会用フライヤーデザイン打合せ(関口、吉川、Watson)
- 3日 事業説明のためマンチェスター出張(5日まで)(平松)

- 5日 Japanese Music and Composer Series: Hearing Kabuki, The enchanting sound of Kuromisu music 出席(於 Japan Foundation) (平松)
- 8日 The Royal Society 主催 Sir Jagdish Chandra Bose 記念講義およびレセプション出席(於 The Royal Society)(平松、関口)
- 9日 グラスゴー大学 戸田 International Business Liaison Manager 来訪(平松、関口)
The Great Britain Sasakawa Foundation 25 周年記念レセプション出席(於在英大)(平松、関口)
- 10日 SECOM 竹澤社長との打合せ(平松、関口)
Health & Safety ポリシー打合せ(関口、Winkler)
- 11日 Mike Winter OBE, Director, International Affairs, Institute of Education との打合せ(於 UCL)(平松、関口)
- 13日 フィンランド出張(6月20日まで)(平松)
- 14日 オフィス IT 関係打合せ(関口)
- 15日 在英日本人研究者会にかかるホームページ打合せ(関口、多田)
- 22日 The Royal Society of Chemistry 主催「Parliamentary Links Day 2010」および昼食会出席(於 The House of Commons)(平松)
小野理事長英国出張(~24日)
- | | |
|-----|--|
| 22日 | 駐英国大使主催夕食会出席(於大使公邸)(平松、関口) |
| 23日 | センター来訪(全員)
UCL 訪問(平松、関口、横山)
The Royal Society 350 周年記念式典およびレセプション出席(於 Royal Festival Hall)(平松、関口)
The Royal Society 主催夕食会(於 The Royal Society)(平松、関口) |
- 24日 The British Academy との外特(欧米短期)申請書にかかる打合せ(平松、Watson)
British Library 往訪・事業説明(平松、Watson)
Daiwa Anglo-Japanese Foundation seminar "Working Lives: Gender and Society"出席(於 Daiwa Japan House)(平松、Winkler)
- 25日 打合せ(於 British Library)(平松)
- 28日 The Japan Societies' Forum 出席(於 Japan Foundation)(平松)
Grange Hotel Mr Kishimoto マネジャー来訪・打合せ(関口)
- 30日 日本、タイ、ラオス出張 出発(7月30日まで)(平松)

監修: 平松 幸三 (JSPS ロンドンセンター長)

編集長: 関口 健 (JSPS ロンドン副センター長)

編集担当: 多田 里奈、吉川 かおり (JSPS ロンドン国際協力員)